
タイトル未定

ヒナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトル未定

【Nコード】

N0476R

【作者名】

ヒナ

【あらすじ】

常に命を狙われている少女、大虎理久。

その少女の前に現れたのは、異世界から来たという少年。

彼は言う――「このセカイを破壊しに来た」と。

ブローグ

——今日もまた、命を狙われている。

切羽詰った状況は常だった。いい加減に神経もマヒしてきてしまう。それでも彼女は毎日同じように全力疾走で、駆け抜けるしかない。

少しでも油断すれば、命はない。

大虎理久はプリーツスカートから伸びる細い足を、可能な限り前へ、前へと進めていた。地面を蹴る音は、小刻みに続いている。

毎日走り込みすぎたスニーカーは、ボロボロに擦り切れてしまっていた。

理久は高架下へと入り込み、息を切らしながら後ろを振り向いた。橋の影になっているこの場には陽光が当たらず、気温は低いはずだ。無我夢中に駆けてきた理久は、全身から汗が噴出すほど火照っている。寒さは全く感じない。

足が短い自覚はあるけれど、全く振り切れていない敵の数を確認してしまつて、げんなりと肩を落とした。仲間の足止めは失敗に終わったらしい。

同じ高校の制服を着た男女が合わせて三人。リーダー格の女子が先導して、こちらに向かつてきている。

まだ走り続けるしかない。橋の下を抜けてもつと隠れやすい場所を探そうと、再び前を向く。

しかし前方からも、敵が二人走ってきていた。挟まれてしまった。

「うああ」

理久の口からは、思わず呻きが漏れ出た。逃げ道を完全に塞がれてしまった。高架下で頭を抱えて、右往左往するしかない。

大体、なんでこんなことになったのだろうか。

理久は涙を浮かばせた恨みがましい眼を、遠く倒れ伏している仲間へと送った。

倒れているのは、軽々しく二人きりで出かけようなんて提案してきた仲間——鹿野だ。

『大丈夫さ、リクのことは俺が命をかけて守るからな!』

……噓つき。

爽やかに歯を煌かせて言い放った鹿野は、敵グループに一撃でやられた。

弱かった。想像以上に弱い護衛だった。

「鹿野君っ!! 命をかけて守る約束はあつ!？」

悲痛な訴えは鹿野にも届いたらしい。鹿野はなんとか理久を守ろうとしてここまで追ってきたのか、見える範囲には転がっている。

うつ伏せで倒れたまま、理久に向けてよろよろと腕を振り上げる。リンチにはあつた様子だが、生存は確認できた。

「すまんリク。俺も必ず後を追うからな……!」

「心中!？」

理久は青ざめて、力が抜けていく。へなへな、とその場に座り込んでしまった。

春先でほんのりと冷たい地面の感触を、腿の内側に感じた。

わずかに顔を上げると、土手沿いにある桜並木道が見える。現在満開の桜の花びらは、ここまで舞ってきている。

桜の花びらの絨毯の中、理久は座り込んだ状態のまま後ずさっていた。

今度こそダメかもしれない。今日こそ、殺されてしまつかもしれない。更に瞳が潤んでいき、視界が悪くなっていく。

「追いついた。もう逃げられないわよ？」

滲んだ視界の中、理久にかけられた声に焦点を合わせた。目の前にいたのは、綺麗な容姿の女子だった。その女子は肩を軽く上下させて、蔑みの眼差しと共に見下ろしてきていた。その後ろにも数人の男女が理久を取り囲む。万事休すだ。

「翠子！^{すいこ} リクに手を出したらただでは済まさないからなあ！」

鹿野の必死な声が耳に届く。這い蹲りながらも、こちらににじり寄ってきている。数人の暴行により、鹿野のそれなりに整った顔立ちが、ぼっこぼこに歪んでしまっているのが見えた。

「黙ってる雑魚。アンタはいつでも口だけなんだから」

「俺は、俺はリクの為ならああ！ たとえ火の中、水の中であつ」

「だからそれが口だけだって言ってるのよ、バカじゃないの」

翠子と呼ばれた女子は鹿野に向けて言い放った。鹿野がぐり、とまとも倒れ伏した。

翠子は口だけで全く抵抗勢力になりそうにない鹿野を無視し、じやり、と更に一步、理久の前へと近付いてくる。

翠子の手握られているのは――ゴルクラブ。

ブレザー姿の女子高生には全く似合わない、穏やかでない代物だ。全力で殴られたら、いくら女の力だとしても確実な殺傷能力がある。

実際、敵グループの手にかかって仲間たちがもう何人も犠牲になっている。平気で、日常的に殺人は行われてしまっている現状。

だから、冗談では済まされない。

相手が本気で殺す気だから、本気で逃げないといけない。けれど恐怖で竦んでしまった身が、言うことを聞いてくれない。理久は座り込んだまま、足をじやりじやりと地面に擦らせ、後ずさっていくのが精一杯だった。

ぺたり、と背中に壁がついてしまった。

「チビツコに恨みはないんだけどね、これ以上抵抗しないでね？
無駄だから」

翠子が、言い放ってくる。シャープな猫目。そして強気な上から視線が、理久を鋭く捕らえてくる。

理久は一生懸命に、不器用な睨みを彼女へと向けた。

「チビツコじゃないもん！ わたしには大虎理久って立派な名前が——」

「名前なんてどうでもいいのよ」

翠子は理久の睨みなど意に介した様子もなく、慈悲深い笑みすら浮かべてしゃがみこんできた。

短く切っているショートボブの髪を撫でられた。完全に子供扱いだ。

「小さいからチビツコって呼んだだけ。全く、アイツは一体この童顔チビツコ女のどこがいいんだか。しかもおデコ全開ってどんだけ幼いアピールしたいんだか」

「ちがつ」

理久は思わず自分の額を両手で覆い隠す。童顔なのは気にしているけれど、前髪を垂らすのが苦手なのでどうしてもヘアピンで留めてしまうのだ。

翠子は一瞬だけ、鹿野の方へと目を遣った。ため息を吐き出し、その時だけ美しい横顔に憂い気な眼を見せた。

運動神経が限りなく鈍い理久だが、普段から命を狙われ続けている経験から、その一瞬の隙を見逃さなかった。

手の平をぐいっと伸ばし、ゴルフクラブの柄を掴む。引き寄せて、奪い取るうとした。

——ゴルフクラブは微動だにしなかった。

「貧弱チビッコが私と張り合おうとしたって、無駄よ」

「きゃあっ」

翠子は理久がゴルフクラブを掴んでいた状態のまま、強引に振り回してくる。当然、理久の身体は吹き飛び壁にぶちあたる。全身に衝撃が走った。

しかし痛みを感じてる間もない。突き刺さるような殺気をビリビリと全身に感じ。理久は振り仰ぎ。

「——死んでね、チビッコ」

残酷な色を瞳に宿した翠子が、既に眼前。

理久は目を大きく見開いていく。

頭に振り下ろされてくるゴルフクラブが、スローモーションのようにつつくりと感じた。ただ迫ってくる凶器を見ていることしか——
がきいん、と大きな音が響いた。

視界いっぱい、火花が散った。

振り下ろされたゴルフクラブは理久の頭蓋を割る直前に、止まっていた。

受け止めていたのは――木刀。

理久が背中をつけている壁の横から、腕が生えていた。

その腕が持っている木刀が、ゴルフクラブを受け止めていた。

「は……？」

壁から生えているように見える腕を、理久は呆然と見遣り、硬直する。

それは翠子も同様にだった。全力で振り下ろしたゴルフクラブを、ぼろりと地面に落としている。

「な、何よ、コレ……腕？」

翠子も驚愕から声を震わせていた。

そして壁から出てきたのは、腕に続いて――足、頭、胴体。

壁から、人間の全身が出てきた。

ざああ、と突風が横風吹き付けてきた。地面に散らばっている桜の花びらが、大量に舞った。

橋の影下、ピンクの花びらが舞い散る空間。

現れたのは、木刀を片手に持った高校生くらいの年頃の、男子だ。その本人も何が起こったのか分からない様子で、視線を周囲に巡らせている。

前髪が長めで、綺麗に整った顔立ち。背もスラリと高く、身体つきもいい。漆黒の学生服に身を包んでいる。

その男子は地面にへたりこんでいる理久の姿に気付き、視線が止まった。

吹き付ける風で黒髪が揺れる。

理久と、目が合った。

「あ、あの……」

吸い込まれそうな深い瞳を持つ男子に見つめられ、理久は頬が熱くなつていくのを感じる。

「……」

無表情の男子からは感情が全く読み取れない。何も言わないで、ただじつと理久を見下ろしてくる。

「ちょっと！ 何邪魔してくれてんのよキミ！ さつさとそこを退いて！」

翠子が男子の背中へと、とがらせた声を浴びせかけてきた。男子が振り向き、今度は翠子へと視線を移していく。翠子も彼の真つ直ぐな眼差しを受けて、頬が赤く染まっているのが見えた。

「な、なな何よ！ 早く退かないとキミごと殺すわよ！？ 見た目が良かったって私は情けなんてかけないわよ！？」

翠子は動揺している様子だったが、拾い上げたゴルフクラブを身体の前へと翳した。

男子も翠子の動きに合わせるように、木刀を構えている。

「やる気なの！？ だったらこっちも容赦は——」

翠子の言葉は、最後まで続かなかった。

男子のスニーカーが、地を蹴った。木刀を振り上げ、鮮やかに跳

躍。

理久には彼が瞬時に木刀を軽くまわしただけに見えた。

「きゃあぁっ」

おそらく木刀を振り回した風圧だけで、翠子が吹き飛んだ。

「亀井さん！？ この野郎一体何を！？」

慌てて走り寄ってくる翠子の仲間たち。彼らにも一体何が起きたのか理解できていない様子だったが、地面に転がされた翠子を見て、怒りの表情を露にしている。

未だ無表情のままの男子へと、各々の武器を振り上げて突進していく。

しかし――

「うわあぁあっ」

次の瞬間には、やはり、全員が吹き飛ばされていた。

身体のうちこちを叩きつけられたのか、痛みに呻きながら、数人が地面に転がっている。

「強い……」

理久は呆然と呟いていた。

どんな動きを見せてやっつけたのか鈍い理久には視認できなかったが、理久の命を狙う輩たちは全員地面に転がっている。

理久は立ち上がり、男子へと駆け寄っていく。

鼓動が高まっていた。命の危機を感じての、動悸息切れではなかった。

初めての感覚だった。

男子の顔を直視できないような、胸の苦しさを覚えた。うつむいて、胸元へと手をあてる。

——わたし、どうかしちゃったのかな。

理久は思い切って男子へと視線を上げる。頬が熱かった。全身も火照ってしまっている。

「あの、あのあのの！ 助けてくれてありがとう！」

「……」

男子の眼がまたも、頭を深々と下げている理久へと向いた。更に鼓動が高まって俯いてしまう。

「リクー！ おーい、無事かあ？」

その時、間の抜けた声が割り込んできた。理久は声の聞こえた方へと目を遣る。鹿野が今更に復活して、走り寄ってきていた。

「鹿野君、絶対やられたフリしてた。見殺しにしようとしてた」

「あああっそんな泣きそうな目でこっち見ないでえっ可愛すぎる！」

鹿野が再び地面に四肢をつき、大袈裟に吐き出した。

理久は鹿野の様子を見て、呆れて溜め息が漏れる。

「リク」

男子の声が耳に届いた。理久は男子へと顔を向ける。低く、耳に

馴染む優しい声音に鼓動は更に高まっていく。

「う、うん。大虎理久っていうの！ あ、あの、あなたのお名前は？」

「俺は、宇佐木唯（みやぎ・ゆい）」

「宇佐木君……」

「唯でいい」

「そ、そんないきなり下の名前なんて呼べません！」

理久は耳まで真っ赤になってしまい、両手を身体の前でぶんぶんと振る。

とてつもなく格好良くて強い男子が、自分を救ってくれた。十五歳の理久にとって、それは衝撃的すぎて。

初めての、感覚だった。胸がほわほわと熱くて、足がフワフワ浮いているみたいだった。

この気持ち、一体なんだろう？

理久はますます落ち着かなくなる。膨らみの全くない胸に再び手をあてて、こそり、と唯を見上げてみる。

「あの……宇佐木君は一体どうやってここに現れたの？」

その方法すら不明だけれど、彼は壁から唐突に現れた。常識では考えられない。

「俺は違う世界からやってきた。そういう能力を持っている」

「違う世界から？ なんの為にだろう？」

理久は首を傾げる。違う世界から来たと言われても、見た目は普通の人間だ。実感は湧かなかった。

謎めいた男子高校生、宇佐木唯は、またも深い瞳で理久を見つめてくる。その瞳の奥には、何かが宿っている気がした。

「あ、話したくないんだったら無理に言わなくても——」

「このセカイを壊しに」

理久の言葉は、遮られた。

唯の感情を含まない言葉によって。

「え……？」

理久の表情が固まる。胸にあてていた手で、自然にぎゅう、と心臓を掴むように強く衣服を握り締めていた。

その拳は、震えてしまっていた。

「俺は、このセカイを壊しにやってきた。全てを破壊しに」

もう一度、唯が紡ぐ。

「もちろん、お前を含めて全て、だ」

『——知ってる？ いつか異世界からウサギの勇者様がやってきてね、セカイを救ってくれるんだよ？』

理久の知っているお話のウサギ勇者はセカイを救うけれど、

異世界から現れた宇佐木唯は、全てを破壊しに、このセカイにや
ってきたのだと、言った。

第一話の一

大虎理久は、呆然と立ち尽くしていた。

まだ微かに冷たい初春の風が、頬を撫でる。土手を上がった場所に並ぶ満開の桜の木から、むせるような花の香りも一緒に流れてきた。

きつちりと黒の学生服を着込み、木刀を片手に持っている男子が、理久の前に立っている。

高架下で、ピンクの花びらが、踊るように舞う。

『俺は、このセカイを壊しにやってきた。全てを破壊しに』

彼、宇佐木唯は確かにそう言い放ってきた。

晴れ渡っている日中だが、影になっているこの場では、彼の表情はどこまでも暗く、曇って見えた。

理久の頭の中はしばらく真っ白だった。自分の耳を疑った。

「嘘とか冗談じゃ、ない、よね……？」

唯は真面目そうな見た目からして、嘘とか冗談を言うタイプには見えない。

けれどひとかけらの淡い希望に縋って、唯に向けて問いかけてみた。

「……」

唯は何も答えなかった。無言でも、どこまでも固い表情で悟れた。理久の喉がごくり、と鳴った。

彼の言葉は、嘘でも冗談でもない。

「リク！ 何ぼーっと突っ立てるんだこのぼんやりさんめ！ 可愛いから許すけどな！ 早く逃げないと！」

いつの間にか鹿野が近くまで走り寄ってきていた。

鹿野の切羽詰った声に、理久はハッと今の状況を思い出す。そういえば敵グループの五人は全員地面に呻き転がっている状態だが、見た感じひどい怪我ではない。復活したら再び襲ってくるだろう。

「う、うん。逃げよう鹿野君」

「よし！ ほーら、手、手」

鹿野が手を差し伸べてくる。理久はすぐに首を振った。

「繋がらないし。同じ年なんだから子供扱いしないでね？ 一人で歩けるし」

頬を膨らませながら、理久はさっさと先に歩き出す。

「子供扱いしてるわけじゃないさ。俺はリクと常に手を繋いで歩いていたんだ。愛してるから」

「そーゆーの、いいから」

「ああつれないっそんなリクも愛してる！」

軽々しい鹿野に可愛いだの愛してると言われる度に、馬鹿にされてる気がしてしまう。理久は振り返ってじとり、と半眼で鹿野を睨んだ。鹿野は理久を見てなかった。今更に唯の存在を認識したのか、

唯の方に目を向けていた。

「おいお前も一緒に逃げるぞ！ コイツラやっちゃったのお前だし、さっさと逃げないと返り討ちに遭うぞ！」

「鹿野君、彼は――」

「ほらほらもたもたすんなって！ 行くぞ！」

理久が声をかけていることにも気付かず、鹿野が唯の手首を一方的に掴んだ。そして、唯を引っ張って強引に走り出してしまう。先に立っていた理久をすぐ様追い越して、二人の背中が遠くなっていく。鹿野の逃げ足だけはピカイチだ。それぐらいしか長所が見当たらない。

「ちょ、ちよつと鹿野君！ 待ってって！！」

逃げることに無我夢中になっている様子の鹿野に、声は届かない。理久は呆れて、深く息を吐き出した。

……けれど正直、少しだけ、ほんのちよつとだけ、嬉しい気持ちもあった。自然と頬が緩んでしまっていた。

もう少しだけでも、宇佐木唯と、一緒にいられる。その状況を作ってくれた鹿野の馬鹿っぷりをありがたくも思う。

なんで喜んでるんだろう、わたし。緩んでしまっていた頬を引き締め、理久も足を速めた。

走る男二人の背中を見つめる。鹿野は目立つ金色短髪頭だ。同じ十五歳なのに、片耳に銀色の十字架のピアスがついている。しかも服装は花柄プリントのピンクのシャツ。ど派手な彼の容姿の所為で、理久は敵に発見された気がしてならない。

鹿野に手を引かれている唯は、飾り気が全くない。清潔に短く切

つてある黒髪と、黒い学生服。顔が美形なこと以外に、目立つところは何もない。

唯は特に抵抗する様子もなく、大人しく鹿野に手を引かれていた。鹿野とてただの派手馬鹿ではない。敵グループにまた遭遇してしまつとは限らないので、逃亡は何度も建物の陰に身を隠しながらだった。敵が現れそうな場所を避け、迂回を繰り返して、道をぐねぐねと走っていく。足が遅い理久はついていくのに必死だった。

何度曲がり角を折れたか、気付けば閑静な住宅街まで来ていた。住宅街は音というものが存在しないのではないか、という程の静寂。鹿野と唯、理久の足音だけが妙に大きく響いている気がした。

建ち並ぶ同じような家宅の一つ、表札も出ていない目立たない平凡な一戸建ての前で、鹿野はようやく足を止めた。

ここまでほぼ無言でノンストップだった。

理久は膝を折って、荒い呼吸を吐き出す。

「息、うまく、できな」

「うんうん。頑張つて走った偉かったぞ大好きだぞ。もう少しだからな」

体力だけはあるのか、疲れた様子のない鹿野が理久の頭をぼんぼんと叩いてくる。そうしながらきよきよと周囲の様子を探っていた。理久も身体を起こし、用心深く視線を巡らす。自分たちがこの家に入っていくことを誰かに見られていないか、長い時間をかけて確認した。

鹿野は一通りの安全確認を終えると、門扉をくぐり、玄関の前に立った。

玄関脇に設置されているドアホンを押す。少し間があつて、室内の相手がガチャリ、と通話ボタンを押した気配。しかし通話相手は、言葉を発さないでこちらの出方を待っている。室内にいる通話相手

には、モニターでこちらの様子は見えているはずだ。

「なんだよ開けてくれよ竜姫^{たつき}」

鹿野がドアホンに向けて言った。

『知らない人がいる。開けられない』

ドアホンからの音は低く、無機質な少女の声だった。

直後にがちゃり、と切られてしまった。鹿野は慌ててもう一度ドアホンを押した。

それから唯の身体をずいと押して、カメラの前に立たせる。

「こいつは知らない奴じゃなくてな！……えーと、アンタ誰だ？
名前、聞いてなかったああ俺の馬鹿ああ」

「竜姫、彼は宇佐木唯君って言うの。わたしたちのこと、助けてくれたんだよ」

理久が後ろからフォローを入れる。

少しの間があつて。

ようやく玄関の鍵が開錠された音が響いた。

鹿野はほつと息を吐いてから、唯に目を向けキラリと歯を煌かせた。

「自己紹介がまだだったな。俺は鹿野ロミオ。リクとはリクたんロミたんと呼び合う仲だ。よろしくな、宇佐木」

「鹿野君かっこつけるのはいいいから中入ろう」

理久は玄関扉を開ける。

玄関には、理久と同じブレザーの制服姿の少女が立っていた。

「ただいま、竜姫！」

理久が笑顔で元気よく言うと、その少女、竜姫は表情も変えずに浅く頷いた。

特徴的なのは地面に届きそうな、真っ直ぐで綺麗な髪。ありえな
い程に長い深緑の髪の毛は、一筋も絡まらずに床に向けてにすとん
と伸びている。

そしてぐりぐりした大きな朱色の瞳が、用心深く唯を見つめてい
た。

理久は二人に挟まれて立ち、唯と竜姫の瞳が同じ色であることを、
その時になってようやく気付いた。

「宇佐木唯」

竜姫がじつと凝視しながら、その名前を紡ぐ。

唯は、竜姫から目を逸らしていた。誰のことも真っ直ぐに見つめ
ていた唯が、はじめて視線を下に落としている。

「宇佐木君？」

理久はのぞき込むように、唯を見上げる。

「この子はね、竜姫って言うの。わたしの大切な友達。ここで一緒
に住んでるの」

竜姫の幼いながらに整った顔は、無表情のままだ。理久は唯に竜
姫を紹介し、それからついでに鹿野も指差した。

「そしてわたしと一緒にいたこの人は鹿野ロミ才君。最近知り合った赤の他人。居候なの」

「その言い方冷たすぎやしませんか!？」

「あともう一人一緒に住んでる人がいて、わたしたちは四人でここに暮らしてるの。よかったら上がっていつてね」

理久はぎこちなく唯に声をかけてから、たたきでスニーカーを脱いで部屋へと上がっていく。

全力で走り抜けた所為でへとへとに疲れ果てていた。腕を天井にのばしながら、コキコキと首を鳴らす。

「全く息抜きにならなかったあ。殺されかけたあ。鹿野君、わたしのこと見捨てたあ」

「だから口だけ馬鹿を信用しちゃいけないって言ったのに」

リビングへと続く廊下を歩きながら、理久はぼやく。後ろから竜姫もついてきた。何気に鹿野に向けて暴言を吐いていた。

「だってリク、ずっと家の中にこもりきりで退屈そうだったからさ、たまには外の空気を吸いたいと思って。俺はリクの願いを叶える魔法使いさ!……あの、上がっていいですか?」

鹿野が言い訳を繰り出しながら、靴を脱ごうとして、半ベソになっている。凍りつきそうな瞳を竜姫に向けられたらしい。

その間も、唯は一言も言葉を発さず、微動だにしていなかった。リビングに続く廊下に立っている同じ年頃のこちら三人を、観察

するようにじつと見つめてくる。

その時、来訪者を報せるチャイムが鳴った。ぴりり、とその場に緊張感が走った。全員が玄関を振り返る。

竜姫がリビングへと入って行き、時を置かずにすぐに戻ってきた。

「金子が帰ってきた」

竜姫が簡潔に告げてくる。

「あ、金子君出かけてたんだね。おーい開いてるよー！」

理久が玄関に向けて声を張ると、扉を開いて現れたのは、やはり同じ年頃の学生服を着た男子だった。

唯とあまり背丈が変わらない、スマートな高身長だ。襟足の長い黒髪、大人びた切れ長の瞳。両手いっぱい紙袋を抱えているクルそうな外見の男子は、理久と竜姫の姿を見とめて、優しい笑顔になる。

「ただいま竜姫ちゃん、理久。そんでもってアンタは誰だ？　なんでここにいる？」

やはり横に立つ唯の存在が気になったらしく、金子と呼ばれた男子は唯へと眼を向けた。優しい笑顔は一瞬で掻き消えて、不審げにじろじろと唯を観察している。

「金子君、彼は宇佐木唯君って言うの。わたしと鹿野君の命の危機を救ってくれたんだよ」

「へえ。そりゃあどうもうちの理久の命を救ってくれてありがとう……って」

金子が唯から視線を外し、靴を脱いで家の中へと上がってくる。

「――鹿野お前また理久を危険な目に遭わせたな」

「あああつそんな怖い目で見たら嫌だああ!!」

「冗談じゃなく、殺すぞ?」

金子の鋭い瞳が、鹿野に突き刺さる。眼つきが悪いので、身が竦むほどの睨みだ。

「宇佐木君、彼は金子二郎君かねじろうっていうの。わたしの幼馴染なの。これで、全員揃ったね」

理久は全員の顔を見渡す。竜姫、金子、鹿野。全員、理久の信頼できる人たち。

「この人たちが、今のわたしの大切な家族なんだ」

唯に向けて紡ぎ、笑顔になれた。大切に大好きな人たちに囲まれて、緊張してギスギスしていた心は解れた。

「上がつて、宇佐木君」

今度は自然に、声をかけることができた。

リビングに五人が次々と入っていく。
まず何よりも、綺麗に掃除された広いリビングは、一面ウサギだ

らけたった。

ウサギのぬいぐるみ、ウサギの置物、絵に描いたウサギ、ウサギのタペストリー、壁にも床にもベタベタとウサギのシールが貼られている。家具も小物も全てウサギで統一されている。

金子がそのウサギなりビングを抜けて、キッチンの方へと消えていく。調達してきた食料を置きに行ったのだろう。

「すごいだろ、この乙女ちつくな趣味は意外にも竜姫によるものなんだ」

鹿野がウサギ耳のついたソファに腰掛けた。自分がこの家の主のようにふんぞり返って、唯に向けて語りかけている。

「意外ってなんだこの馬鹿」

竜姫にウサギのぬいぐるみで、ばしばしと殴られていた。

「おりろ、おりろ、おりろ」

ばしばし、ばしばし、ばしばしばし。

「痛いよう」

鹿野はソファから降り、しくしくと泣き出してしまった。

打ちひしがれている鹿野の元から離れた竜姫は、部屋の隅に置いてある大きなダンボール箱をこそごとやりだした。何やらを取り出して背中に隠し、理久の元へと寄ってくる。

理久の前まで来ると、背中に隠していたものを差し出してきた。

「あ、ウサミミだ」

理久が言っと、竜姫はこくん、と頷く。無言で理久の頭へと手を伸ばし、ウサギ耳を装着してきた。

理久の頭の上で、ウサギの長い耳が揺れる。

「似合う」

あまり表情が崩れない竜姫にしては珍しく、表情を和らげて言ってきた。嬉しそうだ。理久は照れ臭いながらも、はにかみの笑顔を浮かべた。

「今日はこれを作ってたの？」

「うん。上手に出来た。理久に似合うと思って」

「ありがとう、竜姫」

理久は言い、自分の頭に取り付けられたウサギ耳を触ってみる。もこもこして柔らかい耳の感触だった。

「ああなんて萌え萌えなりクなんだ！ 結婚しよう今すぐ！」

復活した鹿野が言ってくる。誰もが無視した。

竜姫はダンボールの元へと戻って、その場にペタリと座り込んだ。今度は製作途中のウサギのマスコットを取り出して、黙々と裁縫をはじめた。見慣れた光景だ。

彼女はいつも、ずっと、毎日、ウサギを製作し続けている。

理久はちらり、と唯に視線を移した。

唯はずっと、全員の一連の行動を観察しているようだった。玄関の時同様に微動だにせず、置物のようにリビングの入り口に立って

いる。

全てのシャッターを締め切った、息苦しいほどウサギだらけの閉鎖空間。独特の空気が流れている部屋で、理久は唯へと歩み寄っていく。

「よかつたら座って、休んでね」

言ってみるものの、唯が動かないだろうことは予測できていた。木刀も握り締めたままだ。

「宇佐木君、うちの高校の制服着てるよね。その学生服、せいまがくえん星馬学園のものでしょう?」

唯の学生服の襟章は、理久のブレザーの胸ポケットについている校章と同じものだ。先ほど金子の着ている学生服を改めて観察して、同じ星馬学園の学生服だと確信した。

「同じ高校なのかな。わたしは一日しか行ったことないけどね」

まだぶかぶかとしているブレザーの袖を持ち上げて、てへへ、と理久は困ったように笑う。

唯は表情を崩さず、一瞥してきただけだ。

「あ、でも異世界から来たんなら、違うのかな」

「……」

「てい」

理久はおもむろに、唯に向けてずいっと握り拳を差し出した。

その小さな拳を、開いた。

——ぽんっ、と飛び出したのは、たくさんの花びら。ふわふわと色とりどりの造花をその場に舞わせた。

少し唯の目が丸くなった。

「ウサギも出ますよ」

小さな身体のどこに隠していたのか、ぼろぼろと理久からどんどん出てくるウサギのぬいぐるみ。

つながった何枚ものハンカチ。ステッキの先からも花が飛び出してみせる。

「これならどうだ！」

今度はステッキの先で、皿まわしをはじめた。

「わたしダメダメな子だからさ、手品くらいしかできないけど」

鹿野がパチパチと大袈裟に何度も拍手を送ってくれる。

「少しでも誰かを笑顔にしてみたいの。こんなセカイでも、楽しく過ごせたらって——」

理久は唯に向けて、笑顔言った。器用にステッキの先にのせた皿をまわし続ける。

直後だった、

唯が木刀を、横薙ぎに払った。

「きゃあっ!？」

——がしゃん、と皿が床に落ちて大きな音をたてた。
皿は粉々に砕けてしまい、ガラス片がその場に散乱した。

「宇佐木！ お前何すんだよ！？」

鹿野の声が途端に張り詰める。唯へと詰め寄ろうとしている鹿野を見て、理久は慌てて声を張る。

「違うよ鹿野君、わたしがびっくりして落としちゃっただけだから。失敗失敗。まだまだ修行不足だなあ」

理久はその場にしゃがみこみ、皿の破片を拾い集める。
理久の横に唯が来た。

今度は理久が取り出したさまざまなものを、木刀で薙ぎ払っていく。

「やめろよ何してんだよお前！！」

鹿野の激昂に、竜姫も顔を上げて、作業の手を止めてこちらに注目している。

騒ぎを聞きつけたのか、金子もリビングに戻ってきた。

全員が、理久の手品をメチャクチャにしまった唯へと視線を集める。

唯が、木刀をおろした。

「言ったはずだ。俺はこのセカイを破壊しに来た」

「宇佐木君それは——」

「全部壊す。さっきだってお前たちを助けたつもりなんてない。目

の前にいる邪魔な奴らを排除しただけだ」

冷たく響く、唯の言葉。

暫く誰も動かなかった。しゃがみこみ、俯いたままの理久は、唯を見ることができなかった。

その中で、金子が一步、唯へと近付いていくのが視界の端に映る。

「だったら出て行け。お前は俺たちの仲間じゃない」

金子は穏やかに、言い放った。

「金子く、」

理久は顔を上げて、キッチンの入り口の方に立つ金子を見る。

「出て行ってくれ」

金子はこれ以上話すことは何もない、とぴしゃりと遮るような笑顔を浮かべていた。

唯の方も何も言わず、背中を向けてリビングから出ていった。すぐ後に、がちゃ、と玄関扉が冷たい音を立てた。

しん、とその場に沈黙がおりた。

理久は床へと視線を落として、皿の破片を拾い集める作業を再開させた。

「痛っ」

皿の破片で指先を切ってしまったらしい、指先にチカリ、と痛みが走った。

続いて指先に、ぷくり、と赤い血が珠のように膨らんでいく。

「大丈夫かリク!？」

鹿野が走り寄ってくる。それでも理久はその場からしゃがみこんだまま、動けなかった。

胸に突き刺さる唯の冷たい表情、冷たい言葉。それを間近にして、震えてしまっていた。

「……どうやったら、笑ってもらえるのかなあ」

——願い、呟く。

彼には、届かない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0476r/>

タイトル未定

2011年10月8日19時11分発行